



Veritas No.19(2002.7.8)

目次 (敬称略)

<特集 アジア>

料理も人情も熱い国、プライド高き国、韓国 浜下昌宏

ア ジ ア を 歩 く、ア ジ ア を 読 む 川村暁雄

アフガニスタンの女性と子どもたち 西垣敬子

女性学インスティテュートと<アジア> 豊福裕子

<ロックフォード1年間を振り返って> 森島朋子

<オルチン文庫にある「讚美歌集」について その三> 茂 洋

<特集アジア>

料理も人情も熱い国、プライド高き国、韓国

浜下昌宏 総合文化学科教授

韓国の人は顔つきが私たち日本人とよく似ています。1991年に初めて韓国を訪問したとき梨花女子大学の兪俊英先生が本学の学生もいっしょに大学近くのお寺に案内してくれたのですが、その和尚さんは「今日は梨花の学生をたくさん連れてきたね」と誤解していました。兪先生は「世界の二国間で日本と韓国ほど密接な関係にあった国同士はない」とよく仰います。国同士の関係のみならず、人的交流についても私たちはたとえば渡来人の功績についてよく知っています。日本の歴史のそれぞれの時期に応じた交流が韓国との間であったわけです。今年はサッカー・ワールドカップの共同開催ということもあって、まさに兄弟姉妹のような付き合いのように発展していますが、しかし、戦前の日本の軍国主義によって生じた摩擦の解消はかんたんではないでしょう。

先日発行されたばかりの本学の広報誌『Vistas』創刊号に、広東外語外貿大学での日本語研修の際の体験について書かれていて、先方の学生から「先生が中国にくる前、私は日本が嫌いでした」と告白され、日本語の先生をした実習生は「号泣」したとのこと。私もそうした体験を韓国で何度か味わいました。「僕は今まで日本人とは口をきくまいと思っていましたが今日から心を入れ替えます」と言われたことありますが、そういう場合、シニカルな私は、「いろんな日本人が居ますからね」と答えておくのが常です。隣国同士で対抗心や近親憎悪的な近さと複雑な歴史的関係を持つ両国の国民の間に、偏向的な教育の影響もあって反日嫌韓の気持がそう簡単に解消するとも思われません。とはいえ、私は悲観もしていません。交流がたんなる形式的儀礼的な関係を越え、恋人同士や結婚する者同士が増えていけば、問題なく日韓の関係は真の兄弟姉妹的になるでしょう。

沢知恵（ともえ）という歌手は日本人の父と韓国人の母の間に生れ、それぞれの国の歌をその国の言葉で歌っています。むろん、彼女の母方の祖父が『朝鮮詩集』『朝鮮童謡選』『朝鮮民謡選』（いずれも岩波文庫）などで私たちになじみのあった金素雲という、戦前戦後に日韓にまたがって活躍された偉大な文学者であるという「血」も彼女に力を与えているのでしょう。ごくごく自然に会い、納得しないことは率直に議論し、おいしい料理と酒を囲んで互いの知恵を出し合えば、障害は解決していくものです。日韓の関係がたとえば歴史教科書問題などでぎくしゃくしても、博多からプサンに向うフェリーはかつぎやおばちゃんたちで変らぬにぎやかさを保っています。一番近い隣国ですから、日帰りでも結構、まず出かけてみてはどうでしょう。

最近ではテレビ・ドラマも韓国を舞台にしたものもあり、また『シュリ』をはじめとする韓国映画もロードショー上映されています（少し古くなりますが私は特に『風の丘を越えて』（原題は「西便制」）が好きです）。本で知識を得たいのであれば、日韓の交流と心理的葛藤の研究書として小島康敬・M.W. スティール編『鏡の中の日本と韓国』（ペリかん社）が問題の歴史的経緯を知るのに便利ですが、やや難しいので、入りやすいところでは、小倉紀藏（現在、NHKテレビのハングル講座の講師）のものがよしい。『韓国は一個の哲学である』『韓国人のしくみ』（ともに講談社現代新書）、『韓国語はじめの一步』（ちくま新書）、『韓国、ひき裂かれるコスモス』（平凡社）などが彼の著作です。司馬遼太郎『街道をゆく2 韓のくに紀行』（朝日文庫）や古田博司『悲しみに笑う韓国人』（ちくま文庫）も読みやすくて良い本です。

もう少し深く知りたい、という方には、むろん分野にもよりますが、姜在彦の著作がおすすめです。『朝鮮近代史』（平凡社ライブラリー）、『朝鮮儒教の二千年』（朝日新聞社）などの記述には迫力があります。また、美術に関しては並木誠士＋鄭干澤『韓国の美術・日本の美術』（昭和堂）が好著。インターネットでの韓国関連の情報の検索はかんたん。「韓国・朝鮮に関する日本語書籍」 www3.a.tufs.ac.jp/~hhonda/Bibkr-jp.html とか、「日韓リンク集」 www.is-mirai.ne.jp/nikannet/nikannet.html をご覧あれ。

最後にご案内をひとつ。来る9月4日から6日まで、神戸女学院美学研究会主宰で第10回日韓美学研究会を開きます。関心のある方は詳細を <http://users.hoops.ne.jp/kaloskagathos/> で見てください。

関連文献

朝鮮詩集	発注中
朝鮮童謡選	080/IW1c/V.386
朝鮮民謡選	080/IW1c/V.694
鏡の中の日本と韓国	950/KO7
韓国は一個の哲学である	080/KO1A/V.1430
韓国人のしくみ	080/KO1A/V.1536
韓国語はじめの一步	発注中
韓国、ひき裂かれるコスモス	304/OG2
韓のくに紀行（文芸春秋社）	850.8/SI7/V.47
悲しみに笑う韓国人	発注中
朝鮮近代史	発注中
朝鮮儒教の二千年	発注中
韓国の美術・日本の美術	発注中

<アジアを歩く、アジアを読む>

川村暁雄 総合文化学科専任講師

ホームページ: www.a-kawamu.com

海外旅行は昔に比べてとても簡単にできるようになってきた。アジアの他の国にでかける人も少なくはない。各地の外国人向けの環境整備は進み、小金があれば気楽に楽しい時間を過ごせるようになってきている。日本国内にも、エスニックレストランが増え、アジアの雑貨などというカテゴリーの商品も生まれた。豆板醤、豆鼓、ナンプラーなどの調味料は普通にスーパーで手に入り、レモングラスやカリアリーフなどのアジアの生ハーブだって少し探せば見つかる。アジア好きの私としては、このような状況はとりあえずありがたい。

でも、アジアの人、社会、国を理解する人々が同じように増えているのか？これはかなり怪しい。

そもそも、今の社会は、他人のことを知らなくてもたいいことができるようになっている。お金があれば良いのである。観光旅行ともなればなおさらだ。ヘタをすれば、24時間お金で全てのカタをつける完全なる消費者となってしまう。お金を使って「気持ちいいもの」（景色であれ、リッチでエスニックな雰囲気であれ、免税の商品であれ）を購入し、消費し、快感を感じて帰国する。まあ、それはそれで良いのだろう。けれど、それで「自分はいろんな経験をして、その国のことがわかった」と誤解をしてしまうとちょっと困る。お金と商品を交換するだけの関係ではわからないことはあまりに多いからだ。

さいわい学生は時間に余裕がある。だから同世代の友だちを現地で作ることも不可能ではない。私の場合は、学生時代は国際学生協会（ISA）に関わっていたこともあり、各国の学生団体のところにふらっと訪れたりした。あるいは、単に大学に遊びに行き友人を作ったこともある。女学院の卒業生Aさんは、旅行前にはアジアポップをいろいろ聴いて、現地でそれをネタに友だちづくりをしていたという。こうしたことは歳をとると簡単にはできない。せつかくのお年頃なのだから、もっと活用したらいいのではないだろうか。

もちろん友だちができたって、実際にその国のことがわかるとも限らない。数千万の人間のうちの何人かでしかないからだ。だけど、一人の人間から見えてくるものは案外に多い。さらにもっとわかりたいという気持ちにはなるだろう。だからそういう気持ちを活かして知識や世界観を深めればいい。

これまたさいわい今は知識を得るための情報源も数多くある。まずオススメは、『もっと知りたい』シリーズ。弘文堂の本で、国別に出ている。各国の研究者が、それなりにきっちりとした解説を行ってくれている。他にも、梨の木舎の「旅行ガイドにないアジアを歩く」シリーズも悪くない。各国の人たちがどのように日本と触れてきたのかを理解するのは、会話をする前提だ。インターネットにも玉石混淆ながら情報は多い。とりあえずアジア・ライターズ・クラブ（AWC）のリンク集（<http://www.asiavoice.net/newslink/>）などは使える。多国籍のビデオジャーナリスト集団、アジアプレスインターナショナルのサイト（<http://asiapress.org/>）も悪くはない。検索エンジンを使えば他にもいろいろと出てくるだろう。

経済的にも、社会的にも日本とアジアの各国の関係はこれからも深まっていくのはまちがいない。その中で自分はどのような位置にいるのかを考えておいて損はない。そのためには、相手の視点を理解することが何よりも重要だ。アジアが近くなってきた今だが、それを「消費」するだけではあまりにもったいない。ぜひ多様な視点を手に入れて、自分を豊かにする機会にしてほしいと思う。

関連文献

“もっと知りたい・・・”（弘文堂）
旅行ガイドのないアジアを歩く（梨の木舎）

910.8/KO3/V.1-
発注中

<アフガニスタンの女性と子どもたち>

西垣敬子 宝塚・アフガニスタン友好協会



典型的なアフガン料理

1993年8月、東京のイスラミックセンターでアフガン大使館主催の「アフガニスタン・フリーアゲイン」展を見ました。写真約150枚。旧ソビエト軍と戦うアフガングェリラ、地雷で足を失った少年、家族をすべて失った老人。その後ソ連軍は撤退し、ゲリラ各派により開かれたロヤシルガ、そして暫定政権樹立に至る様子など、どれも貴重な写真でした。この写真を借りることに成功。宝塚市および宝塚市国際交流協会の協力を得て、1994年4月、第一回「アフガニスタン・人々とその暮らし」展を宝塚で開催することが出来ました。私が、主婦の座から一歩

踏み出した瞬間、といえるでしょうか。アフガンに関わって9年目を迎えようとしています。アフガニスタンを含む中央アジアの仏教美術史を専攻したこともあり、ずっと行きたいと思う国ではありました。



ミシンを使う避難民女性刺繍をする若い女性

1994年11月に初めてこの国を訪れ、15年もの間戦乱の中にあるこの国に生きる女性の生き方を目の当たりにして、何か自分に出来ることがあるのではないかと考え、行動を開始しました。女性と子どもを対象をしぼり、無我夢中で手探りの援助活動を始めた訳です。戦争で夫を失った女性たちのための自立訓練として、避難民キャンプで手回しミシンによる洋裁教室を開いたり、日本で集めた刺繍糸を持ち込んで、キャンプで配って刺繍をしてもらったり、いろいろな活動をしました。



ブルカを被ったまま子どもを医者に見てもらおう母親達

1996年、タリバーンと呼ばれる人たちがこの国を実行支配するようになって、これらの教室が解散に追い込まれました。そして女性に対する過酷な布告が出されました。就業と就学の禁止。以来丸5年間、この国には医者と看護師以外に女性の職はなく、小学校から大学まで女性の教育の機会が奪われたのでした。しかし、勉強がしたい、この一念で各所で少女たちのための秘密の教室が開かれました。失職中の女性教師がタリバーンに内緒で国語、算数、地理などを教え、22人の給料を私の協会が出していました。



タリバン統治時のかくれ学校 物置にてタリバン統治時のかくれ学校 野原にて

昨年9月11日の同時多発テロによってアフガニスタンという国が世界中から注目を浴びるようになりました。昨年11月にタリバーン政権崩壊。やっと女性は解放されました。学校も再開、この春、嬉々として登校する少女たちや女子大学生の姿を見て感無量でした。

復興に向けて立ち上がったアフガニスタンはしかし前途多難。問題は山積みです。世界中から寄せられる復興資金が隅々まで行き届くには時間がかかります。本当に届くかどうか不明です。私は、今後も今まで通り、こつこつと、最も貧しい人を対象に活動を続けるつもりです。

<女性学インスティテュートと<アジア> —— アジア関連の定期購読雑誌の紹介>

豊福裕子 女性学インスティテュート教学職員

学生の皆さんはあまりご存知ないかもしれませんが、女性学研究の促進をめざした女性学インスティテュートの誕生（1985年）には、神戸女学院大学のアジア女性研究所（The Asian Women's Institute:以下、AWI）への加盟という出来事が大きく関わっています。AWIは、アジアの女性の連帯を掲げて、インド・パキスタン・レバノン・フィリピン・韓国・日本のキリスト教主義女子大学によって結成された組織で、規約によりすべての加盟校が女性研究センターを設置することになっていたのです。日本からは、東京女子大学と本学の2校が参加しました。1991年秋には本学が会場校となり、「テクノロジー時代における女性と環境」というテーマのもと、第7回AWI国際会議が開催されています。

1995年頃を境に、諸般の事情によりAWIはその活動を休止するに至りましたが、女性学

インスティテュートではそれ以後も、設立の契機ともなった〈アジア〉への思いを込めて、講演シリーズ等を企画してきました。1996年の連続企画「アジアの女性」(全7回)に始まり、本年6月には連続セミナー「アジアの女性とジェンダー」(全4回)を開講しています。

女性学インスティテュートの図書室にはアジア関連の図書・ビデオがあり、どなたでも自由に利用していただけますが、ここではよりリアルタイムなアジアの情報を得るという視点から、定期購読雑誌を3点ばかり紹介したいと思います。学生の皆さんが活用して下さることを期待しています。

1) 『女たちの21世紀』: 前身の「アジアの女たちの会」20年の歩みをふまえ、1995年に設立された「アジア女性資料センター」(東京都)の機関誌です。同センターの代表は、『魂にふれるアジア』(朝日新聞社、1986年)、『女たちのアジア』(岩波新書、1987年)等の著作で知られるフリージャーナリストの松井やよりさん。女性運動、人権、開発、環境、戦争・武力紛争、南北問題などをキーワードに毎号特集を組み、同センター主催の講演・報告会・シンポジウムの記録をはじめとして、研究者、ジャーナリスト、弁護士、NGOスタッフなど多彩なジャンルの執筆陣より寄せられた記事が掲載されています。現状の変革に向けて、常に行動・実践と密接に関わった編集内容であることが、同誌の特徴であるといえるでしょう。季刊(年4回刊行)。
[所蔵: 創刊号~第30号]

2) 『アジア女性研究』: 編集・発行は「(財)アジア女性交流・研究フォーラム」(北九州市)。1990年、同市の「ふるさと創生事業」として設立された団体で、アジア地域の女性の交流とそのための調査・研究を軸に事業活動を展開しています。『アジア女性研究』は同フォーラムの研究誌ですが、生活に密着したものをめざして、研究者によるものだけでなく、公募による自由投稿論文やアジアの女性事情などを掲載し、幅広くアジアを捉えられるよう編集されています。年1回刊行。[所蔵: 創刊号~第11号]

その他、同フォーラムでは、アジア各国の女性の現状を統計資料にもとづいて紹介する冊子「アジア女性シリーズ」を刊行中です。[所蔵: No.1~No.8]

3) 『アジア ウェーブ』: 発行はアジア文化社(東京都)。『東南アジア通信』を母体に、1993年より刊行されている月刊の「アジアライフ&イベント情報」誌です。創刊者で編集長の五十嵐勉さんは小説家でもあり、1982年から10年余りの間、タイ・カンボジア・ベトナムなど東南アジア各地を巡り、東北タイでは僧侶になったこともあるというユニークな経歴の持ち主です。「人間同士としてのアジアを伝える雑誌をつくりたい」という五十嵐さんの強い想いと、ボランティアの参加と支援によってこれまで支えられてきた同誌でしたが、経営上の問題と五十嵐さんが編集を離れざるをえないという事情が重なり、今年に入って一時存続の危機に見舞われました。幸い、2002年5月号(No.107)よりは北溟社(東京都)が編集・発行を引き継いでいます。

[所蔵：No.45～No.108]

<附記>ご紹介した定期購読雑誌は、いずれも女性学インスティテュートにて閲覧・貸し出しいただけます。ご希望の方は図書館本館1Fの当インスティテュートまで。

<ロックフォード1年間を振り返って>

森島朋子 英文学科4年生

まだ走り出したばかりの21年間の人生の中で最大のターニングポイントとなるであろう2年間の留学生活が始まったのは去年の夏。ロックフォード大学での1年間は一瞬一瞬を真剣に悩み、考え、楽しんだように思います。この1年は数えきれないほど多くの人と出会い、様々な刺激を受けました。そのような体験を通して、英語は私にとって第二外国語というよりむしろ、言語という枠を超えて「私」というアイデンティティーを確立するための媒体となっています。

最も印象に残る授業は興味本位でとり続けたポリサイ(Political Science)のクラス。去年の9月11日のテロ事件の際、アメリカの報道機関は「パールハーバー以来の悲劇」と取り上げ日本人として少し複雑な気持ちでした。また、ブッシュ大統領の演説の中で「アメリカ国民を全力で守る」というくだりを耳にした時、自分がアメリカではマイノリティであることを痛感し、同時に日本人であることを自覚しました。まるで日本人が世界のマジョリティーであるかのような錯覚をもち、国に守られることが日本で当たり前になっていた私にとってこの演説は強い衝撃でした。

ポリサイのクラスは講義形式ではなく生徒自身がクラス全体に疑問をもちかけ、ディスカッションすることを期待されていました。ディスカッション中のアメリカ人の迫力や話すスピードの速さに驚き、なかなか自分の意見を伝える勇気を持たずにいたのですが、どうしてもテロに関する報道に疑問に思うことがあり、クラスに意見を求めてみました。すると、みんな私の意見を尊重した上で各々の意見を述べ、話題がアメリカと日本の関係を軸として原爆問題にまで発展していったのです。

日本ではおとなしいと「謙虚な人」とみなされますが、アメリカでは意見をたとえもっていても、それをみんなに伝えない限り「意見のない人」とみなされます。そうしたギャップに悩み続

けた1年間でしたが、幸運なことにもう1年間ロックフォードで学べるのでこの1年間の間に感じたことを実践しようと思っています。

ポリサイのクラスはペーパーも多く、自分が興味をもった話題について15枚のペーパーを書かなければならなかったのですが、生徒の可能性を引き出そうと教授がいつでも快く相談にのってくださったので最後までやり遂げることができました。アメリカ式の授業方式は受身の講義に慣れている私達にタフな印象を与えますが、情報や知識を共有し合いながら、一人一人の意見を尊重し合うという意味で心地よさを感じてきています。

こうして戸惑いばかりの1年間を陰で支えてくれた家族、KCC副会長の杉浦様、ホストファミリーや友達に心から感謝します。来年の卒業に向けてあと1年。春休みにミシシッピー州にボランティアに行き、アメリカ南部に実際に触れてアメリカ文学、特に黒人文学に興味を持っています。黒人文学を文学の視点からだけでなく様々な角度からとらえてみたいと思っています。新鮮な目を持ち続けながら、残り1年を自分にとって意義ある時間にしたいです。

図書館本館の〈読み物コーナー〉に留学に関する本を揃えています。

アメリカ留学事典

留学ベストガイド

海外留学をめざす人の本

正しい留学の手引き

大学留学

大学生のための就職に強い留学

留学は人生のリセット

イギリス留学ガイド

なぜアメリカの大学は一流なのか

今後も充実させていく予定です。

また、新館にも留学に関する本があります。どうぞご利用ください。

＜オルチン文庫にある「讃美歌集」について その三＞

茂洋 本学名誉教授

明治初期讃美歌の中でもっとも早く出版されたのは、摂津第一基督公会（現在の日本基督教団 神戸教会のこと）の讃美歌集「無題」（06）の讃美歌でした。その中の歌八つの初めの三つは、横浜の長老派教会から来た讃美歌でした。

後の五つの讃美歌は、神戸で作られたものですから、その全部を紹介しましょう。

まず四番の讃美歌（06-04 の写真参照）を見てみましょう。オリジナルの写真の第四の下を見て下さい。Dr. Davis と書かれています。これはオリジナルではなく、オルチンさんが後で書き込んだものです。でもこの書き込みは正しいと考えられています。デーヴィスさんは、神戸女学院の創設者たちと同じ組合教会 (Congregational Church) の宣教師で、新島襄と一緒に同志社を創設した方です。でも彼がこれだけの日本語を用いることは出来なかったと思われるので、誰か日本人が助けたのでしょう。でもそれが誰か分かりません。日本語は大変貧弱で、その上キリスト教になじんでいません。二節一行目の後半に「えほばしせり」などと書かれています。これは、「イエスしせり」の間違いです。「えほば」とは「神」のことですから、これはとんでもない間違いですね。でもこの歌は、主イエスの十字架の出来事によって、神の恵みがあらわされたことを讃えているやさしい讃美歌です。

はじめの讃美歌集には楽譜がありませんでしたので、どのように歌おうとしたのかわかりません。ただ神戸では、次に出された讃美歌集 09 のローマ字版に、英語の曲名が記されているので、当時の宣教師たちが持っていた英語の讃美歌集からそのメロディーを見いだすことができます。この 06-04 は MOODY という曲で歌ったようです。その後同じ組合教会の讃美歌集 15（明治 15 年）の 89 番にもっときれいな日本語で、今度は木版ではありますが、MOODY の楽譜で記されています。

かみがくんだり にんげんとなりて
ゆだやにうまれしが これいえずなり

おさなきより こころなざれし
そのまじたきこころは わがてほんなり

ああへりくんだり おのれにかちて
ひとをたすけたまはしが わがみぢなり

にんげんにかわり つみをあがな
じゆうじかにしせしが わがたすけなり

神がふどり	人同とせり
大おけま	まじりて
かさなきより	孝がみぢなり
そのまじり	まじりて
ゆだやにうまれ	おのれにかちて
人を配けぬ	こがみぢなり
人留ふか	まじりて
十家集	まじりて

六番、七番、八番の讚美歌の説明は次号に記します。今度は松山高吉さんたちの日本人による讚美歌です。